

各関係機関長 様

熊本県病虫害防除所長

病虫害発生予察予報について（送付）

このことについて、令和8年度（2026年度）病虫害発生予察予報第1号を発表しましたので送付します。

予 報

令和8年度（2026年度）病虫害発生予察予報第1号（4月予報）

I 主要な病虫害の発生予想概要

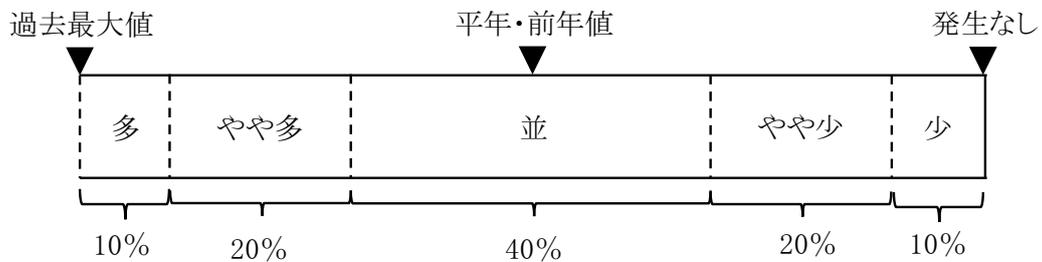
| 作物 | 病虫害名 | 3月の発生状況 | | 4月の発生予想 | |
|-------|-------------------|---------|-----|---------|-----|
| | | | 平年比 | 平年比 | 前年比 |
| 麦類 | 赤かび病 | | — | やや多 | 並 |
| 茶 | カンザワハダニ | | 並 | やや多 | 多 |
| かんきつ | そうか病 | | 並 | 並 | 並 |
| | ミカンハダニ | | やや少 | 並 | 並 |
| なし | 黒星病 | | — | 並 | やや多 |
| トマト | 黄化葉巻病 | 冬春作 | やや多 | 冬春作 やや多 | 並 |
| なす | すすかび病 | 冬春作 | 並 | 冬春作 並 | 並 |
| きゅうり | べと病 | 冬春作 | 並 | 冬春作 並 | 並 |
| うり科野菜 | 退緑黄化病 すいか退緑えそ病 | 冬春作 | 並 | 冬春作 並 | 並 |
| いちご | ハダニ類 | 本ぼ | 多 | 本ぼ 多 | 多 |
| | アザミウマ類 | 本ぼ | 並 | 本ぼ 並 | 並 |
| | アブラムシ類 | 本ぼ | 並 | 本ぼ 並 | 並 |

| 作物 | 病害虫名 | 3月の発生状況 | | 4月の発生予想 | | |
|-------|-------------------|---------|-----|---------|-----|-----|
| | | 平年比 | | 平年比 | | 前年比 |
| 果菜類全般 | 灰色かび病 | 冬春作 | やや少 | 冬春作 | 並 | 並 |
| | コナジラミ類 | 冬春作 | やや少 | 冬春作 | 並 | 並 |
| | アザミウマ類 (いちご除く) | 冬春作 | やや多 | 冬春作 | やや多 | やや多 |

II その他の病害虫の発生予想概要

| 部門 | 4月の発生予想 | (作物) 病害虫名 |
|-----|---------|--|
| | 平年比 | |
| 果樹 | 並 | (かんきつ) かいよう病 (なし) 赤星病 |
| 野菜類 | 並 | (トマト) 葉かび病、すすかび病 (なす) うどんこ病 (ばれいしょ) 疫病 (うり科野菜) つる枯病 (野菜類全般) アブラムシ類 |

※ 発生程度は平年（過去10年間の平均値）・前年と比較し多～少の5段階で示している。



Ⅲ 4月の主要な病害虫の防除対策と留意点

麦類

1) 病害

- ・薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の異なる薬剤のローテーション使用を行う。
- ・赤かび病は、最初薬に感染するため、主な感染時期は大麦が蒴殻抽出期（穂ぞろい10日後）、小麦が開花期（出穂7～10日後）である。薬剤の効果は予防が主体であり、開花期以降の降雨が感染の機会となるため、薬剤による防除効果が最も高い開花期以降に2回の防除を行う。1回目の防除適期は、二条大麦が穂揃い期（全茎の80～90%が出穂した日）の10日後頃（出穂期12～14日後が目安）、小麦が開花期始～開花期（1穂につき数花開花しているものが全穂数の40～50%に達した日、出穂期7～10日後が目安）であり、2回目の防除適期はそれぞれ1回目の散布から7～10日後である。防除時期の目安となる出穂期や開花期は、気温に左右されるため生育状況に注意する。

また、病害虫防除所ホームページの「調査データ」(<https://www.pref.kumamoto.jp/soshiki/75/201915.html>)に出穂期（3月下旬）頃から掲載する赤かび病多発条件出現日の判定結果を確認し、防除の参考にする。

茶

1) 虫害

- ・4月からチャノキイロアザミウマ及びクワシロカイガラムシの有効積算温度シミュレーションによる各地の防除適期や、ハマキムシ類のフェロモントラップによる誘殺消長を病害虫防除所ホームページの「調査データ」(<https://www.pref.kumamoto.jp/soshiki/75/201915.html>)に掲載するので、これを参考に適期防除に努める。
- ・萌芽～1葉期にツマグロアオカスミカメやチャノキイロアザミウマ、チャノミドリヒメヨコバイを対象とした薬剤防除を行う。
- ・ほ場をよく観察し、1～3葉期にハダニの発生が100葉当たり10頭を超える場合は薬剤防除を行う。

果樹

1) 共通事項

- ・果樹を加害するチャバネアオカメムシとツヤアオカメムシの予察灯及びフェロモントラップの誘殺状況を4月から病害虫防除所ホームページの「調査データ」(<https://www.pref.kumamoto.jp/soshiki/75/201915.html>)に掲載し、随時更新するので、これを参考にほ場を見回り、早期発見、早期防除に努める。

2) 病害

- ・かんきつでは、幼芽期（新芽が5mm以内）にそうか病の予防に努める。
- ・かんきつかいよう病は発病した旧葉や枝が伝染源となるため、せん除を行い、銅剤を定期的に散布する。
- ・なしでは、開花期初期～落弁期に黒星病の予防防除を徹底する。薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の異なる薬剤のローテーション使用を行う。また、薬剤の年間使用回数はQoI系（FRACコード：11）、DMI系（FRACコード：3）及びSDHI系（FRACコード：7）がそれぞれの系統で2回、DHODHI剤（FRACコード：52）は1回を基本と使用する。

3) 虫害

- ・ハダニ類は、定期的に園を観察し、多発する前に殺ダニ剤による防除を行う。かんきつのミカンハダニでは、雌成虫の寄生葉率が30～40%または寄生頭数が10葉当たり5～10頭、ナシのハダニ類では、雌成虫の寄生葉率が20%以上または1葉当たり1～2頭に達したら薬剤防除を行う。
- ・果樹カメムシ類は、局地的に飛来し、被害をもたらすことがあるので、定期的に園を見回り、早期発見と薬剤による初期防除を徹底する。特に、山間部や山沿いの園地は被害を受けやすいので注意する。チャバネアオカメムシの越冬量については、令和8年2月10日付け病害虫発生予察技術情報第10号 (<https://www.pref.kumamoto.jp/uploaded/attachment/301622.pdf>) を参照する。

野菜

1) 共通事項

- ・チョウ目害虫の発生状況については、4月から病害虫防除所ホームページの「調査データ」(<https://www.pref.kumamoto.jp/soshiki/75/201915.html>) に掲載するフェロモントラップへの誘殺状況を参考にする。
- ・薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の異なる薬剤のローテーション使用を行う。

2) 病害

- ・換気や排水を良くし、過湿の防止に努める。
- ・ウイルスに対しては、発病株が二次伝染源となるので、見つけ次第抜き取り、直ちに処分する。ウイルス病抵抗性品種であってもウイルスを保有するので、媒介する微小害虫の防除を継続して行う。

3) 虫害

- ・ほ場周辺および内部の雑草は、微小害虫の生息・増殖場所となるので定期的に除草する。
- ・微小害虫は気温の上昇とともに活動が活発になるため、「増やさない」対策を徹底する。本対策は微小害虫が媒介するウイルス病に対しても有効である。冬春果菜類の栽培地域におけるタバココナジラミ防除については、令和7年11月6日付け病害虫発生予察技術情報第9号 (<https://www.pref.kumamoto.jp/uploaded/attachment/294706.pdf>) を参照する。
- ・トマトでは、ほ場をよく見回り、トマトキバガによる被害の早期発見に努める。被害葉や被害果実は速やかに除去し、ほ場外に持ち出して適切に処分する。本虫の密度を抑制し拡散を防ぐため、栽培終了2週間前まで本虫に登録のある薬剤防除を行う（令和7年9月22日付け病害虫発生予察注意報第4号 (<https://www.pref.kumamoto.jp/uploaded/attachment/290263.pdf>) を参照）。
- ・イチゴでは、殺ダニ剤を散布する際は、令和7年5月1日付け発生予察技術情報第1号 (<https://www.pref.kumamoto.jp/uploaded/attachment/279436.pdf>) を参考にして選定する。また、ハダニ類の本ほからの持ち込みを防ぐため、親株ほの管理作業は最初に行う。
- ・栽培終了後の「出さない対策」を徹底する。微小害虫の施設外への飛び出しを防ぐため、栽培終了後は必ずハウスを密閉してから一斉に植物を枯らす。地域で取り決めた密閉処理期間を遵守し、微小害虫を完全に死滅させる。施設内の片付けは、密閉処理が終了してから行う。

F A X版はここまで

発生予想の根拠等を含む詳細については、ホームページ掲載の電子版をご利用ください。
<https://www.pref.kumamoto.jp/soshiki/75/125504.html>

IV 主要な病害虫の予想発生量（平年比）と根拠

- ※ 根拠各項に記した先頭の「○」は重視した根拠、「◎」は特に重視した根拠であることを示す。
- ※ 根拠末尾の（+）は発生を助長する要因、（-）は発生を抑制する要因、（±）は影響が少ない要因であることを示す。

九州北部地方の向こう1か月（3月21日～4月20日）の気象予報 福岡管区气象台発表

| 要素 | 低い・少ない | 平年並 | 高い・多い |
|------|--------|-----|-------|
| 気温 | 10% | 10% | 80% |
| 降水量 | 20% | 40% | 40% |
| 日照時間 | 50% | 30% | 20% |

麦類

1) 赤かび病

- (1) 予想発生量 平年比やや多
- (2) 根拠

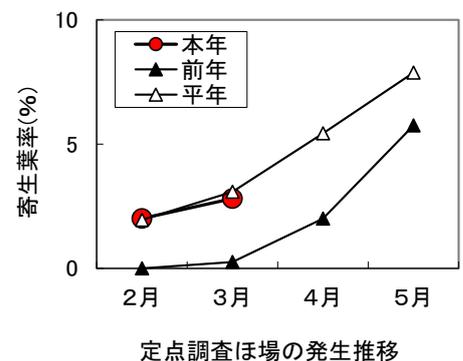
◎ 向こう1か月の気温は平年より高く（+）、降水量は平年より多い～並（+）の予想である。

茶

1) カンザワハダニ

- (1) 予想発生量：平年比やや多
- (2) 根拠

- 3月の定点調査（8か所）では、寄生葉率2.8%（平年3.1%）と平年並の発生であった（±）。
- ◎ 御船町（茶業研究所）の3月第4半旬の定点調査では、寄生葉率17.0%（平年9.0%）と平年比やや多の発生であった（+）。
- 防除員報告（5地域）によると、3月の発生は平年並～やや少であった（±）。
- ◎ 向こう1か月の気温は平年より高く（+）、降水量は平年より多い～並（-）の予想である。



かんきつ

1) そうか病

(1) 予想発生量：平年並

(2) 根拠

- ◎ 3月の定点調査(12か所)では発病が認められず(平年0.2%)、平年並の発生であった(±)。
- ◎ 防除員報告(7地域)によると、3月の発生は平年並であった(±)。
- 向こう1か月の降水量は平年より多い～並の予想である(+)

2) ミカンハダニ

(1) 予想発生量：平年並

(2) 根拠

- ◎ 3月の定点調査(22か所)では、雌成虫の寄生葉率1.5%(平年5.2%)、寄生頭数0.2頭/10葉(平年1.9頭/10葉)と平年比やや少の発生であった(-)。
- 防除員報告(7地域)によると、3月の発生は平年並であった(±)。
- ◎ 向こう1か月の気温は平年より高く(+)、降水量は平年より多い～並の予想である(-)。

なし

1) 黒星病

(1) 予想発生量：平年並

(2) 根拠

- 令和7年8月の定点調査(6か所)では、平年比やや少の発生であった(-)。
- 向こう1か月の気温は平年より高く(+)、降水量は平年より多い～並の予想である(+)

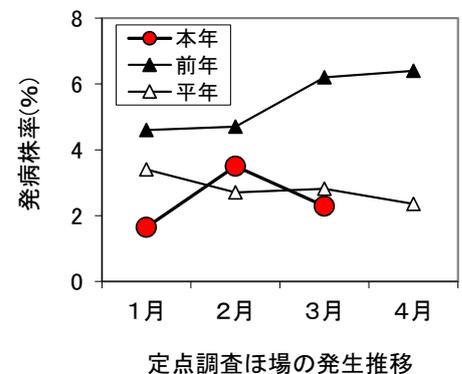
トマト

1) 黄化葉巻病

(1) 予想発生量 冬春作：平年比やや多

(2) 根拠

- 3月の定点調査(7か所)では、発病株率2.3%(平年2.8%)と平年並の発生であった(±)。
- ◎ 防除員報告(3地域)によると、3月の発生は平年比やや多～並であった(+)。
- ◎ 向こう1か月の気温は平年より高い予想であり、媒介虫であるコナジラミ類に対して好適な条件となる(+)。



なす

1) すすかび病

(1) 予想発生量 冬春作：平年並

(2) 根拠

- 3月の定点調査（5か所）では、発病株率 16.4%（平年 31.7%）と平年比少の発生であった（－）。
- ◎ 防除員報告（4地域）によると、3月の発生は平年並であった（±）。
- 向こう1か月の降水量は平年より多い～並の予想である（＋）。

きゅうり

1) ベと病

(1) 予想発生量 冬春作：平年並

(2) 根拠

- 3月の定点調査（6か所）では、発病株率 11.3%（平年 15.7%）と平年比やや少の発生であった（－）。
- ◎ 防除員報告（2地域）によると、3月の発生は平年並であった（±）。
- 向こう1か月の降水量は平年より多い～並の予想である（＋）。

うり科野菜

1) 退緑黄化病

(1) 予想発生量 冬春作：平年並

(2) 根拠

- 3月の冬春きゅうりの定点調査（6か所）では、発病株率 12.7%（平年 8.5%）と平年比やや多の発生であった（＋）。
- ◎ 防除員報告（2地域）によると、3月の発生は平年並であった（±）。
- 向こう1か月の気温は平年より高い予想であり、媒介虫であるコナジラミ類に対して好適な活動条件となる（＋）。

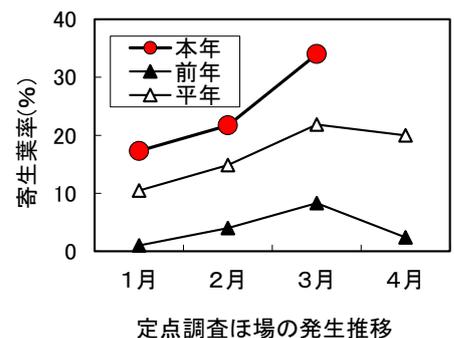
いちご

1) ハダニ類

(1) 予想発生量 本ほ：平年比多

(2) 根拠

- ◎ 3月の定点調査（6か所）では、寄生葉率 34.0%（平年 21.9%）と平年比多の発生であった（＋）。
- ◎ 防除員報告（3地域）によると、3月の発生は平年比やや多であった（＋）。
- ◎ 向こう1か月の気温は平年より高い予想である（＋）。



2) アザミウマ類

(1) 予想発生量 本ぼ：平年並

(2) 根拠

- 3月の定点調査（6か所）では、寄生葉率7.3%（平年24.9%）と平年比少の発生であった（－）。
- 防除員報告（3地域）によると、3月の発生は平年比やや多～並であった（＋）。
- 向こう1か月の気温は平年より高い予想である（＋）。

3) アブラムシ類

(1) 予想発生量 本ぼ：平年並

(2) 根拠

- ◎ 3月の定点調査（6か所）では、寄生葉率2.0%（平年2.0%）と平年並の発生であった（±）。
- ◎ 防除員報告（3地域）によると、3月の発生は平年比やや多～並であった（±）。
- 向こう1か月の気温は平年より高い予想である（＋）。

果菜類全般

1) 灰色かび病

(1) 予想発生量 冬春作：平年並

(2) 根拠

- 3月の冬春トマトの定点調査（7か所）では発病株は確認されず（平年9.0%）平年比少、冬春なすの定点調査（5か所）では発病株は確認されず（平年2.0%）平年比やや少、冬春きゅうりの定点調査（6か所）では発病株率1.0%（平年2.3%）と平年比やや少、いちごでは発病株は確認されず（平年0.0%）平年並の発生であった（－）。
- ◎ 防除員報告（9地域）によると、3月の発生は平年並であった（±）。
- 向こう1か月の降水量は平年より多い～並の予想である（＋）。

2) コナジラミ類

(1) 予想発生量 冬春作：平年並

(2) 根拠

- 3月の冬春トマトの定点調査（7か所）では寄生葉率0.4%（平年0.9%）と平年比やや少、冬春なすの定点調査（5か所）では寄生葉率3.2%（平年6.0%）と平年やや少、冬春きゅうりの定点調査（6か所）では寄生葉率2.0%（平年0.9%）と平年並の発生であった（－）。
- ◎ 防除員報告（9地域）によると、3月の発生は平年並であった（±）。
- 向こう1か月の気温は平年より高い予想である（＋）。

3) アザミウマ類 (いちご除く)

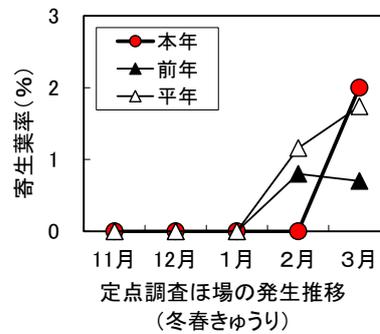
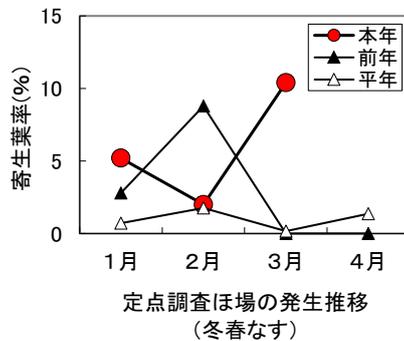
(1) 予想発生量 冬春作：平年比やや多

(2) 根拠

◎ 3月の冬春なすの定点調査(5か所)では寄生葉率10.4%(平年0.2%)と平年比やや多、冬春きゅうりの定点調査(6か所)では寄生葉率2.0%(平年1.7%)と平年並の発生であった(+)。

○ 防除員報告(6地域)によると、3月の発生は平年比やや多～並であった(±)。

◎ 向こう1か月の気温は平年より高い予想である(+)。



V 農薬安全使用

農薬を使用する際は、必ずラベルなどで使用方法を確認し、登録がある農薬を使うとともに、収穫前使用日数や使用回数、希釈倍数等を遵守しましょう。

また、ミツバチや魚介類など周辺動植物及び環境へ影響がないよう飛散防止を徹底し、事前に周辺の住民や養蜂業者等へ薬剤散布の連絡を行うなど、危害防止に努めましょう。

VI その他

本情報は病虫害防除所のホームページにも掲載しています。

病虫害発生予察情報に関する詳細な内容等については、病虫害防除所(農業研究センター生産環境研究所内、電話096-248-6490)にお問合せください。

ホームページを
チェックだモン!



©2010 熊本県くまモン